

第3回『森の広場』市民観察会

# 観察ガイドブック



**2007(平成19年).5.13**

主催： 森の広場市民観察会実行委員会（青森市内8団体参加構成）

共催： 新城縁故者委員会、薫風津軽地方句会

協力：青森市生涯学習課スポーツ推進チーム

後援： 青森市、東奥日報社、NHK青森放送局

主催8団体：「青森の自然環境を考える会」「ウォッチング青森」「青森野鳥の会」「青森自然誌懇話会」  
「青森森林インストラクターの会」「やぶなべ会」「青森県樹木医会」「青森・草と木の会」（順不同）

# 行ってみたい、感じてみよう

## 春の野山のウォッチング！

「森の広場市民観察会」も三回目を迎えることが出来ました。草や樹の葉は開き、昆虫や小動物も繁殖・成長する時期になりました。小鳥も囀っています。さあ、ゆっくり歩いて春の野山を楽しみましょう。

### ■「第3回森の広場市民観察会」次第

1. 受付	09:30～
2. オリエンテーション	10:00～
3. 観察会	10:30～
4. 解散	12:00

#### 「森の広場」設置の経緯

太平洋戦争後、合浦公園に建設された市営競輪場の郊外移転に選択されたのが新城財産区所有の森林地帯でした。当時新城財産区から譲り受けた森林約53haの内、競輪場建設に要した22haの残存森林の利用法として考えたのが「スポーツその他の多目的広場」だったようです。名称は「森の広場」とし、管理棟、研修室、トイレなどの他、野球場、ゲートボール場などを林野庁補助事業である「生活環境保全整備事業」で整備したもので、管理運営は青森市生涯学習課スポーツ振興チーム所管の施設となりました。しかし、残念ながら利用者は野球同好者だけで、他に山菜採りの人が訪れる程度だったため、周辺の手入れも疎かにされ、せっかく整備したミズバショウ観察路も崩落したままになっています。地元新城の住民ですら知らない場所で長い間眠った状態の施設でした。

この度の青森市内自然愛好諸団体の合同観察会をきっかけに一般市民への啓蒙を計り、将来的には「青森野草園」をも視野に入れた運動に発展できればと考えております。

遊歩道だけは毎年管理を委託されてきた「新城財産区縁故者委員会」の皆様により刈り払いが行われ、歩きやすく整備されております。四季折々の森林浴や草木の観察ルートとしてご利用下されば今回の合同観察会を企画した関係者一同の喜びでもあります。

市民観察会スタッフ一同

## 植 物 ( 1 )



スマレサイシン (スマレ科)

やや大型のスマレで紫色や白色の変化がある。画像のようなシロバナ株は比較的少ない。「スマレサイシン」は「オオバキスマレ」とともに大株になりやすく、山菜としての利用価値もある。地下茎はとろろの様な粘りがあり美味であると言われている。スマレ類は無毒で食べられるが食べるよりは可憐な春の花として鑑賞して欲しいものがある。(写真はシロバナスマレサイシン)



テングスマレ (スマレ科)

「ナガハシスマレ」とも言われ、スマレの仲間では花弁の後ろにある距(きよ:ニワトリの距「けづめ」に見立てた)が「天狗」の鼻の様に長いのでこの様な名前がある。「森の広場」には「オオタチツボスマレ」(表紙)、「タチツボスマレ」など、近似種がいろいろあるので比較しながら観察されたい。



タチツボスマレ (スマレ科)

人家周辺の小さな空き地から山野まで生育環境が広く、最も普通に見られるスマレである。「タチツボスマレ」の「ツボ」は家庭の庭(坪)にも生えると言うことから名前が付けられたと言われている。近似種の「オオタチツボスマレ」や「ナガハシスマレ」などと「距」の長さや草丈などを比較しながら散策するのも面白い。青森県には花茎に毛のある「ケタチツボスマレ」が多い。



エゾアオイスミレ (スマレ科)

葉や葉柄にはたくさんの毛が生えている。寒冷地に生えるスマレで地下茎を生じないので株は孤立する場合が多い。「森の広場」でも個体数は少ない。スマレの仲間では余り目立たない存在である。(別名マルバケスマレ)

## 植 物 (2)



アキタブキ (キク科)

雪が消えた跡に真っ先に目に付くのが「バツケ」であるが、前年に花芽が準備されている。花は雄花(右下)と雌花(左下)が別で、雄花の方は少し黄色っぽく見えるのに対し、雌花は白っぽく見える。雄花のバツケは花粉を放出してしまえば枯れてしまうが、雌花のバツケは受粉後茎が50cmほどに伸びて、タンポポのような綿毛を付けた種を飛ばす。この伸びたバツケの茎も美味である。



ミズバショウ (サトイモ科)

春の訪れとともに話題にもなるし、写真愛好家の被写体にも選ばれ、清楚な感じのする「ミズバショウ」である。「森の広場」には見事な「ミズバショウ」の群生地があり、「森の広場」開設当初ミズバショウ観賞用の歩道橋があった。現在、橋は落ちて使えない。ミズバショウ鑑賞の市民が多数訪れる様になれば観察用歩道橋の早期復活に繋がるかも知れない。



シュンラン (ラン科)

野生蘭の1種で、日当たりの良い林床に咲く。一名「ホクロ」とも言われ、産地によって花の色調に色々な変異があるので愛好家も多い。最近環境の変化と愛好者による盗掘でめっきり少なくなっている。昨年のお観察会の後でも残念ながら盗掘された株があった。野生種はその環境で鑑賞するのが最も美しい。『トル』のは写真だけにして頂きたい。



ミツバアケビ (アケビ科)

明るい日差しの中で黄緑の葉の間に濃い紫色に咲く「アケビ」の花は美しい。雄花と雌花が分かれていて房状になっている。小さな球形の花は雄花で、花穂の付け根につき、濃紫色の3枚の萼の中にバナナ状の子房が見られるのが雌花である。他の樹木に巻き付いた蔓は、寄主を枯らすほど強力ではなく、「アケビ細工」の材料に利用されている。

## 植 物 ( 3 )



オトメエンゴサク (ケシ科)

早春、カタクリの花が咲く頃同時に咲く「ケマンソウ属」の植物で名前のように可愛らしい。花の形は少し変わっていて横長の袋状花がほぼ同じ方向を向いて咲く。青森県では浅虫の湯の島に群生する株が見えがあるとされ、シーズンになれば渡船する客で賑わっている。また、近似種のエゾエンゴサクは漢方薬(延胡索)としても利用されている。(旧名エゾエンゴサク)



キクザキイチゲ (キンポウゲ科)

「スプリング・エフェメラル(春のはかない命)」とも言われ、早春、落葉広葉樹の林床で「カタクリ」、「オトメエンゴサク」などとともに林床を飾る代表的な花である。木々の葉が茂る頃には地上部が枯れてしまう。色は白色～紫色まで変化がある。花卉に見えるのは全て萼片で、普通10枚前後で構成されている。花の色は場所によって紫色系が多い場所と白色系が多い場合がある。(別名キクザキイチリンソウ)



ヒトリシズカ (センリョウ科)

林地の日陰に株立ちになって生えている。葉は光沢があって4枚輪生し1本の花穂が立って白い花を付けるが萼や花弁が無く、針状の「シベ」だけから構成されている。純白の花穂が静かに立っている様子、しかも1本だけと言うことで「一人静か」と命名されたようである。名称の似た植物に花穂が2本立ちの「フタリシズカ」(別種)と呼ばれる植物もある。



キジムシロ (バラ科)

日当たりの良い山野にごく普通に見られる植物で、5～9枚の奇数羽状複葉(きすうじょうふくよう)の葉を広げ、株の周辺に集散花序(しゅうさんかじょ)を伸ばし、その先に1～1.5cmの5弁の黄色花を咲かせる。周囲が未だ枯れ葉に覆われている頃に円形に広がった株全体がキジが座る筵(むしろ)に見立て命名されている。山麓から中腹にかけて全国各地に普通に見られる。

## 植 物 ( 4 )



ウワミズザクラ (バラ科)

北海道から九州に分布する落葉高木。枝の2次枝の先端に長さ6～8cm程度の総状の花穂を付け、30個前後の白色花を付ける。花卉は5枚であるが雄しべは花卉よりもはるかに長くよく目立つ。果実は房状に結実し、緑色～赤色～黒色に変化する。花または緑色の果実を採取して果実酒を作れば香りの良い果実酒が出来る。



キブシ (キブシ科)

早春、「マルバマンサク」に次いで咲く林縁の木で、一房に10個～30個前後の釣り鐘状の黄色の小花が垂れ下がって咲く。雌雄異株で花の中に黄色の花粉が見えるのが雄花で、緑色の雌しべが見えるのが雌花。昔のご婦人(一部の男性も)は成人すると歯にお歯黒を塗る風習があり、その材料に用いられ未婚・既婚のサインにもなっていたらしい。



ツルリンドウ (リンドウ科)

蔓性の植物であるがあまり高いところに巻き付くよりは地表を這ったり、小さな植物に巻き付く程度。夏の終わり頃花を付けるが、実は晩秋に赤くなり冬を越す。新芽が秋に出て雪に押しつぶされても緑の葉とともに、赤くなったルビーの様な実も早春まで残っているのでその存在が分かる。見頃は晩秋だと思いが、早春まで残っている赤い実もよく目立つ。



クルマバソウ (アカネ科)

北海道、本州など北半球の比較的寒冷的な地域に分布し、日陰に群落を形成している。葉は長さ2.5～4cmで6～10枚輪生する。茎の先に白色漏斗(ろうと)状で4裂した径4～5mm程度の小花を7～8輪付ける。日陰で白い花の咲く頃はよく目立つ。

## 植 物 (5)



チゴユリ (ユリ科)

やや明るい林床に小群落を形成して生えている。草丈は15~30cmで普通白い花を1輪うつむき加減に咲かせている。可愛らしさから「稚児百合」の名が付けられている。時には2輪付いている場合もある。また地域によっては少し赤味を帯びた花もあるようだ。花の後には球形の実を付け、熟せば黒くなる。しかし、繁殖は地下茎による栄養繁殖が主と見なされる。



ゼンマイ (ゼンマイ科)

水気の多いところを好み溪流沿いに生えることが多いが、普通の林地でも生える。葉は2回羽状複葉。シダ植物としては葉の切れ込みが少ないタイプに属する。小葉は丸みを帯びた三角形で光沢はない。胞子葉(ほうしょう)は独立していて「鬼ゼンマイ」などと呼ばれ、山菜の中では乾物品が高価に取引されるので職業的な採集者もいる。乾物は手間暇を要するが、単純な塩蔵処理も出来る。



ハンゴンソウ (キク科)

北海道から中部以北に分布する植物で丈は1m程度に達する。葉は3~7に深裂して秋に直径2cmくらいの黄色の花を多数咲かせる。山菜としては利用価値があり、早春の若芽はややあくは強いが美味で各種料理に利用できる。名前の由来は「反魂」で葉の形が魂を呼び戻す「幽霊」の手に似ているからとされている。外来種の「オオハンゴンソウ」の花は直径60mm位ではるかに大きい。



ヤマウルシ (ウルシ科)

春の新芽が開く頃は美しい。また、秋には比較的早く紅葉し秋の訪れを感じさせてくれる。低木で直立する幹はあまり枝分かれせず先端に開葉する羽状複葉は長さ50cm程に達する。漆採取可能かも知れないが収量は僅かである。若芽や枝の切断箇所から出る樹液は肌に付くと「漆かぶれ」を起こすので、かぶれの出やすい人は要注意。「ツタウルシ」よりは毒性は弱い様である。

## 植 物 (6)



ツタウルシ (ウルシ科)

山地にごく普通に分布している。葉は3出複葉(さんしゅつふくよう)の蔓性植物である。「漆かぶれ」を起こしやすいので要注意植物である。林床1面に這っているか、気根を出して樹木をよじ登っている。切断したり、若芽を折ったりすれば「ウルシオール」を含んだ樹液を出し、肌に付けば「漆かぶれ」に抵抗性がある人でもかぶれることがある。春の芽出し、秋の紅葉は美しい。



タニウツギ (スイカツラ科)

北海道～本州の主として日本海側に自生する低生灌木。里山にごく普通のこんもりと美しい花を咲かせる。青森では「ガジヤシバ」と言って忌み嫌われている。それは枝が火に強いことから骨拾いの箸に使われるとか、棺の中へ亡者の杖として入れる風習があるためらしい。秋田県では「イワシ花」とも呼ばれるが、この花が咲く頃に「大羽イワシ」がやってくることに由来している。



ニワトコ (スイカツラ科)

ごく普通に分布する低性灌木、葉は奇数羽状複葉で春円錐花序の中にたくさんの乳白色の小花を付ける。やや悪臭があるが、果実は果実酒の材料に使われる。若い枝の髄を押し出して乾燥させたものを顕微鏡観察の際、組織標本の薄い切片を切り取る支持材(ピス)として古くから利用されてきた。若葉を山菜として利用する場合もあるが少量がよく、多量に食べると下痢を起こす。



トチ (トチノキ科)

落葉高木。葉は掌状複葉(しょうじょうふくよう)で大きく広がる。「森の広場」には植栽された1画があり、花を付ける程に成長している。トチの木は溪流沿いに多産して、花から多量の蜜が分泌される。開花期には蜂蜜業者が多数の巣箱を持って移動採蜜する。秋に落下する「トチの実」は渋を抜いて食用にするほか、橡木(とちみず)として打ち身の民間薬とされている。



## 動物 (1)



アズマヒキガエル (画像はガマ合戦)

「アズマヒキガエル」は繁殖期になると池など特定の場所に多数集まって産卵する習性がある。雄は滑らかな肌になり黄色や農褐色に変身する。変身した雄は雌を見つけると雌の背に乗りガッチリと雌を抱きかかえたまま産卵場所へ誘導して産卵させる。雌を見つけられなかったアブレ雄は雌を奪い取ろうと争奪戦が展開される。この様子を「ガマ合戦」と表現している。



ニホンアマガエル

最も普通に見られるカエルで、雨の降りそうな時に一斉に鳴く習性がある。体色は周囲の色調に合わせて色々変化する。草むらにいる場合はほとんど緑一色であるが、鼻孔から目の後方(鼓膜後方)にかけて黒斑があるので「アオガエル」属とは容易に区別できる。繁殖期は「ヤマアカガエル」や「アズマヒキガエル」に比べればやや遅く晩春～初夏の頃である。



モリアオガエル

泡状の卵塊(写真)を木の枝に生み付ける習性があるので珍重され、自治体指定の天安記念物に指定される場合もある。「森の広場」にも少数個体棲息し、6月中旬頃調整池周辺の樹上に卵塊が散見される。近似種に「シュレーゲルアオガエル」がいるが、産卵は地上(水辺の岸)の草の間に行われる。両種の色調は極めて類似しており、はっきり区別するのは極めて難しい。



ヤマアカガエル

早春最も早く産卵を開始する。池の周辺に1mほどの残雪が残っていても産卵が見られることから越冬は水中の泥の中と思われる。産卵は池の特定場所に集中して行われ、産卵時期の異なる卵塊が複数混在している場合が観察される。産卵からオタマジャクシになるまで室温(15~20℃)で約10日間かかる。産卵は例年だと3月中であるが、少雪の2007年は3月2日初産卵が記録された。

## 動物 (2)



コサナエ

田植えの頃に出現する春のトンボという意味で「早苗トンボ」と言うグループに分けられている。このグループのトンボは普通流水性であるが「コサナエ」だけは止水域に棲息している。「森の広場」の調整池で多数発生して遊歩道のフキの葉に止まっているのが観察できる。「早苗トンボ」の仲間は羽化する時、ほとんど平らな所でも可能である。水際で羽化中の個体が見られるかも知れない。



クロスジギンヤンマ

「ヤンマ」類の中では早春から出現するトンボで5月中旬には画像のように産卵を始めている個体も見られるかも知れない。調整池の北岸では水際のヤナギなどの枝に多数の羽化殻(羽化は深夜)が見られた。成虫の胸部は美しい黄緑で黒い力強い黒条が2本ある。「ギンヤンマ」は広く開放された水域を好むのに対し、「クロスジギンヤンマ」はやや狭い水域でも繁殖する。



ヨツボシトンボ

早春の湿地を代表する「トンボ」の1種で体がガッチリしたトンボ。4枚の翅の中央部に黒い斑紋があるので「四つ星トンボ」と呼ばれている。春にだけ水辺に現れるのであまり人目に付かないまま出現期が終わっているのかも知れない。各地の湿原には普通のトンボである。黄色の地に黒斑のある毛深いトンボで、大きさは中型で飛翔スピードは速い。



トラフシジミ

里山に早春から現れるやや普通の「シジミチョウ」で、とくに春の個体は縞模様が鮮やかで、「虎斑シジミ」と命名されている。夏の個体は白い縞模様が褐色になって目立たなくなる。幼虫はマメ科植物の他、色々な植物の花や軟らかい葉を食べて育つ。成虫はいろいろな花で吸蜜しながらやや速いスピードで飛翔する。しかし、飛翔距離は短くすぐ止まる習性がある。

## 動物 (3)



ヨコエビ

小型の甲殻類(エビ・カニの仲間)で、文字通り横になって泳ぐ習性がある。この仲間の生息域は森林地帯の落ち葉の中から深海の底まで幅広く、たくさんの種類が知られ、分解者として働く一方、魚類などの餌資源としても重要である。「森の広場」の調整池にもたくさんのヨコエビが住んでいるが、沢目を堰き止めて出来ただけのこの調整池では魚類の棲息は未確認である。



スジエビ

淡水産のエビの仲間である「ヌカエビ」(青森県内の水田地帯～湿地に普通に棲息)よりはるかに大きく、♀では5cmほどにもなり食用にも利用されている。また、釣り餌としても利用され、販売されている場合もある。体はほとんど透明で黒い帯模様がある。分類上はテナガエビに近い種類で、肉食性である。普通「ヌカエビ」とは共生せず、湿地よりは湖沼域に棲息する。



オオミズスマシ (甲虫類)

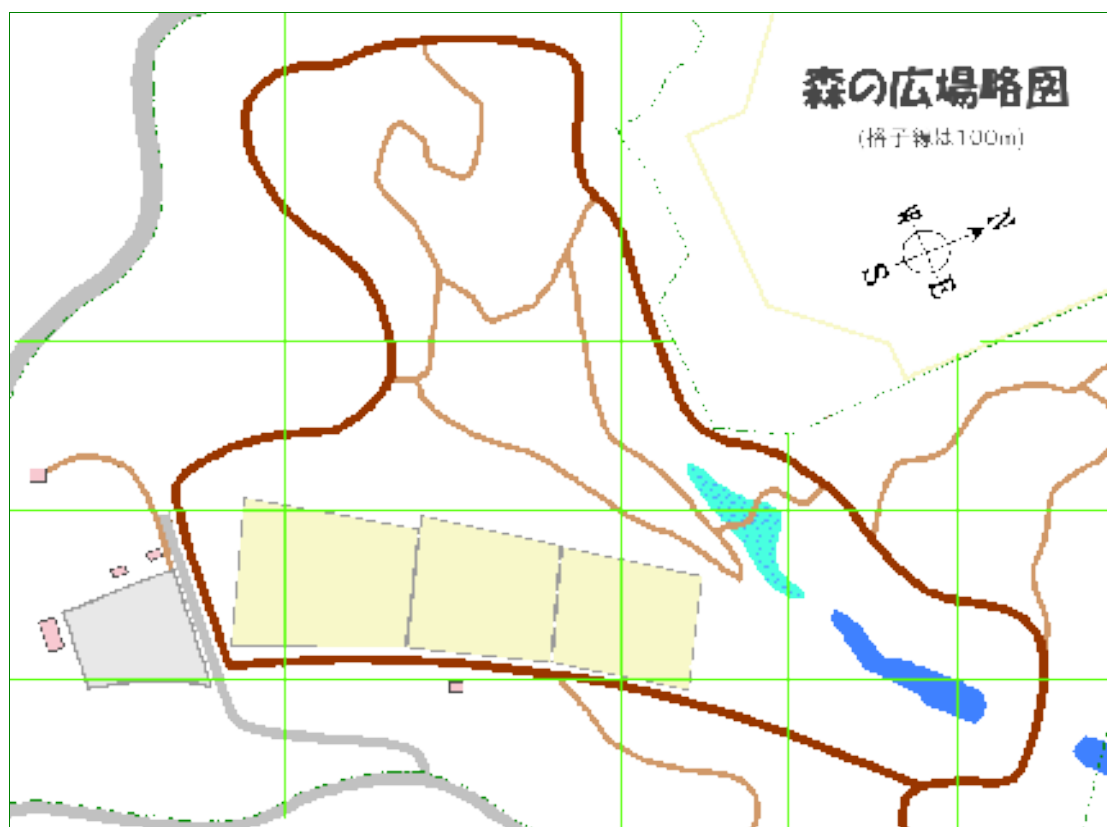
水の上をスケーターの様に軽々と滑走する「ミズスマシ」は子供心にも不思議な生き物である。この「オオミズスマシ」は「ミズスマシ」より一回り大きく、翅の末端に突起がある。「ミズスマシ類」の眼は特殊な四つ目構造で、水面上の餌と水中の餌を見分けられる構造になっている。くるくる回る動きの速い行動は天敵からの攻撃を防御するための行動と考えられている。



ミズムシ (セミ目)

窓の網戸が普及していなかった頃、電灯に飛び込んでくる昆虫の中に「風船ムシ」と呼ばれる昆虫がいたのを知っているでしょうか？コップに入れた水の中を勢いよく泳ぎ、そこに沈めた紙片に掴まると体の中に溜め込んだ空気の関係で紙片とともに浮かんでくる。浮かべば慌ててコップの底に潜り、また紙片を掴んで浮上。この繰り返しを見つめるのが当時の子供の自然観察であった。

森の広場観察路略図 (『森の広場』での観察メモとしてご利用できます。)



ガイドブック制作: 青森・草と木の会、やぶなべ会 (2007.5.13)